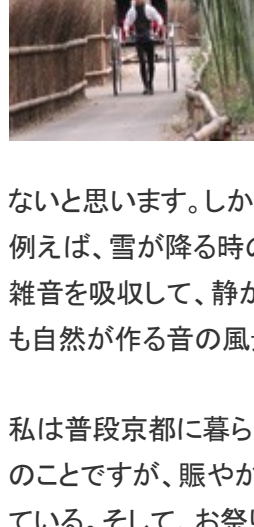


明治安田生命

音で感じる関西

専門家インタビュー

音風景への誘い 小松正史(京都精華大学教授・作曲家・ピアニスト・音育家)



街は色々な音であふれています。しかし、どうしても目から入ってくる情報に比べて刹那的。同じ場所で聞いても、季節や時間、気候など、聞く時によって聞こえ方は異なります。音を感じる耳という器官は、実によくできています。耳は目と違って自分の意志で閉じることはできませんが、必要な音を無意識に選んで聞いてってくれています。もちろん、聞きたくない耳を塞ぎたくなるようなときもあります。

山、川、木々など自然が奏でる音、祭・催事、民俗芸能、商い、職人さんがものを作るときに出す音…様々な音があり、その音が作る風景があります。音楽ならともかく、環境の音を普段意識することは少ないし、目に見えない波動なのであまり関心を持っている人は少ないと思います。しかし、この音を作り出す風景は色々な情報や思い、情景を秘めています。

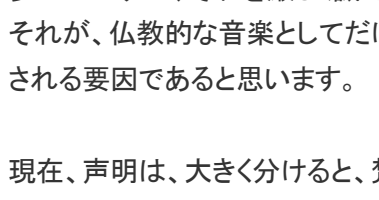
例えば、雪が降り始める時の「しんしん」という音。この音から思い浮かべる風景は、寒さ厳しい折に積もった雪が周囲の雑音を吸収して、静かな佇まいをつくり、1つの景色として成立しています。これが情景ですね。風の音や、雨だれも自然が作る音の風景です。また、車の音や鐘の音、犬の鳴き声などは日常生活の中に組み込まれた音です。

私は普段京都に暮らしています。贅沢なことに、観光名所や古刹に囲まれています。京都市民にとっては当たり前のことですが、賑やかな通りを1歩入ったところの路地は静寂が広がっているし、市場では元気な商いの音が響いている。そして、お祭りや行事の頃になると、千年の長きにわたって響いてきたであろう音に出逢う。この音たちが実に古都京都らしさを感じさせます。そして、京都の風土を象る水の気配も忘れてはなりません。鴨川などの岸辺も大好きな散歩道ですが、街中にある湧き水や井戸。水を使った産業の音、人の生業の音も心地いい。最近では、熊野の音風景にも興味を持っています。木々の梢を撫でる風の音、古道を歩く音…悠久の時間を感じることが出来ます。

音を感じることは、自分の体のことを感じるきっかけにもなるし、五感が研ぎ澄まされるように感じます。五感が研ぎ澄まされると、脳が生き生きする。それは老若男女ともに言えると思います。そのためのメソッドとして、耳と、音育(おとい)を開発し、実践しています。意識的に音を使うことで、生活は能動的に変わります。自分の好きな音、素敵と感じる音を記録する、音地図(サウンドマップ)作りを、仲間たちと試してみたいかがでしょうか。聞こえた音を図示する方法で、紙と筆記具があれば誰でもできます。同じ場所で、同じ音、同じ時間を過ごしているのに、仲間とは、自分とは違う音の世界を持ち合わせているということに気づきます。比べてみると実に興味深いので。まるで、他人の脳内を垣間見るようです。

関西にもたくさん音風景が広がっています。音風景を観ると、これまで視覚中心であった街の風景が一変します。今回、様々な有識者の方が様々な音風景を紹介してくれているようです。では、有識者の皆さんの脳内を見せて、いえ、読ませていただきます。

心が洗われる声明 潮 弘憲(種智院大学教授・海福寺住職)



インドでお釈迦さまが経文をお唱えすると、それは自然と素晴らしい旋律となりました。これが声明(しょうみやう)の始まりとされています。そして、中国に伝えられた声明は、平安時代、唐に渡った弘法大師空海、伝教大師最澄が現地で学んで持ち帰りました。2人の声明は、真言声明、天台声明として日本に根を下ろしました。

古来、真言宗声明には、洋楽と同じような音符・音階・音名・階名・調子等が教則本の中に表記されており、それにより声明が伝えられてきたのです。しかし、声明は師資相承で、師匠から弟子に全てもらさず伝えられるのが本義であり、弟子は師匠と直接対面して、曲説や口伝を伝授してもらいます。

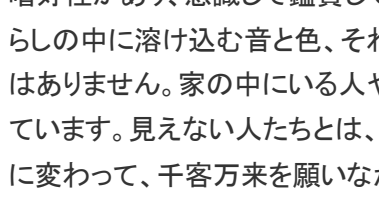
また、声明には数百曲があり、伝承や習得には長い時間を要しますが、その稽古が真言宗の修行ともなわれています。したがって、当然なことですが、うますげな曲で謙虚さをもって、まだまだ足りない、生涯を通じて努力精進すべきであると伝えられています。少しばかりの稽古をして曲節ができるようになると、それでよしとされる人が多いのですが、それを厳しく認められています。

それが、仏教的な音楽としてだけではなく、魂の琴線に触れる、深い気韻のある旋律として、多くの方々から評価される要因であると思います。

現在、声明は、大きく分けると、梵讃(梵語の声明)、漢讃(漢語の声明)、和讃(日本語の声明)の3つがあり、それぞれを組み合わせることで、法会がとり行なわれています。また宗教的な行事の他に、グレゴリオ聖歌隊とのコラボレーション、天台声明と真言声明の合同コンサートなども行なわれ、声明を聴いていただける機会も多くなってきています。

平安より脈々と千年以上も続いてきた声明の荘厳な調べは、邦楽と言われるジャンルの民謡・浄瑠璃の語り物・謡曲など、日本の音楽の源流とも言われています。京都・高野山等の真言宗総・大本山の法会に唱えられる声明は、縁の深い関西の方に、心を込めて聴いていただき、体感していただきたい音風景です。きっと魂に響くと思います。

街に響くちんどんの音色 林 幸治郎(ちんどん通信社リダー・東西屋代表取締役社長)



「東西、と一ざい、御前に控えしは、東西屋・林幸治郎でございます。現在では数少ない、ちんどんを生業にしております。ちんどん屋といえども、お若い方はご存知ない方が多いかもしれませんが、広告の元祖といえようべき歴史のある仕事でございます。頃は弘化2(1845)年、大阪は千日前・大阪法善寺の鈴売りの鈴売りが始めたと言われております。鈴売りは竹製の鳴り物と売り声で人気者になり、この売り声を売ることができなかつたとき、寄席の客寄せを請け負います。短い法被に大きな笠、脚絆にわらじ、拍子木をさげて町に出て、「今日は松屋の何々亭…」とやったのが始まりでございます。

口上はここまでにして、ちんどんについてお話ししたいと思います。ちんどん屋は3人から5人ぐらいのグループで活動します。ちょんまげや日本髪、目を引く派手な着物姿で、ちんどん太鼓という楽器を先頭に、クラリネットなどを演奏しながら街を練り歩き、チランを配ったり、広告主の口上を述べながら客寄せを行ないます。ちんどん屋の音楽は、道行く人の注意を引いて、その店に行ってみようという気持ちになってもらうためのものです。そのため心がけて嗜好性があり、意識して鑑賞してもらうような音で、街中に響く耳障りな音でもない。風のように聞き流せて、暮らした中に溶け込む音と色、それがちんどんだと思います。演奏や口上は、目の前の人に対して行なっているのではありません。家の中に入っている人や離れたところにいるお客さまなど、目の前にいない人に向けて演奏し、口上をしています。見えない人たちは、その街の地霊というか神さま、仏さまへの奉納という意味合いもあります。広告主によって、千客万来を願いながら、街を練り歩き、芸能を奉納するというので、商売繁盛を祈ります。そのため、その土地に合う音楽や口上、踊りなどを工夫しながら演じています。だから、街にすんなり溶け込むことができるのだと思います。

ハリや中国…世界中あちこちで演奏しましたが、特に関西の街はちんどんとの相性がいいように思います。演奏しているとき、それこそ老若男女が音を頼りに探って来たり、駆け寄って来てくれたり、写真を撮ってくださったり、熱烈歓迎してくれます。さすが、大阪生まれの楽器です。若い人も、出会う機会が少ないかもしれないけれど、何だか懐かしいと言ってくれます。ちんどんの音色は、関西人のDNAに組み込まれた懐かしい音風景なのかもしれません。

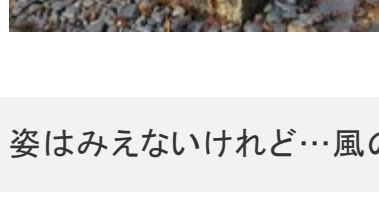
関西各地で聞こえる音

水郷めぐり/櫓の音が誘うのどかな時間



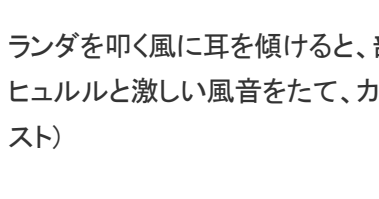
琵琶湖八景に数えられる近江八幡の水郷。くねくねとした水路を小さな舟で巡るのが人気の「水郷めぐり」です。春に芽吹いたヨシはぐんぐん背を伸ばし、夏には水面からの高さが1メートル程に。「ギンシー、ギンシー」と手漕ぎの櫓の音、「チャポン、チャポン」と水面の音。船頭さんのオリーブ、葉先に停まったオトコシキリや空を舞うツバメの鳴き声……。運よくアフリに遭遇すると、お客さんの歓声も響きます。約70分の船旅は長いようであっという間。のどかな音の世界です。(木村真弓 フリーアナウンサー)

奈良公園の洞水門(とうすいもん)



奈良公園の意外なところに水琴窟の繊細な音色を楽しめるスポットがあります。鶯池という古池をめざし、池に張り出した浮見堂わきの小道を南に進んですぐのところに、音の仕掛けが待っています。1991(平成3)年ごろ、周辺整備の一貫としてお目見えしました。地中に伏せて埋められた壺の水門より滴が落ちて細やかな反響音を導き、耳を傾けると、風を懐かしむような表情。これも1つの水景であると感じさせます。(浅野詠子 ジャーナリスト)

姿はみえないけれど…風の音は聞こえます



初夏に届いた葉書を返せば、丹後ちりめんにかかれた、京都北部・伊根の舟屋風景でした。ああ、この湾から、風が運ばれてきたのだと思えば以前旅したことのある舟屋の路地を急ぐひとの背が見えました。山麓のマンションに住むわたしの部屋は、小学校と幼稚園を抱きかかえるように山があり、玄関を開くと山からペランダに抜ける風の通り道になります。風の電車が早いスピードで走り抜ける真ん中で、詩集を開きます。嵐の夜はペランダを叩く風に耳を傾けると、部屋に入れてくださいと言っているようで、ほんの少しガラス戸を開くと、ヒュルル、ヒュルルと激しい風音をたて、カーテン越しに部屋に風が侵入。遠雷と一緒に聞きました。(寺田 操 詩人・コラムニスト)

阿弥陀さんの肩たたきの音



毎年1月14日の夜。念仏寺塔々堂の鬼走り(午後9時開始)では、赤鬼、青鬼、茶鬼の3匹の鬼が、火のついた大きな松明を持って堂内を走り回るといふ行事が行なわれます。これは重要無形民俗文化財に指定されている行事で、室町時代の文明18(1486)年から500年以上の間、欠けることなく続けられてきました。山里に春を呼ぶ行事として、地域に守られています。この行事では、山伏の吹く法螺貝の音や、僧たちの誂経の音、鬼の掛け声、鐘の音、焚き火や松明が燃えてバチバチと火花がはじける音など、さまざまな音が響きます。もともと珍しいと思われるのは、「阿弥陀さんの肩たたきの音」という音です。内陣、須弥壇の裏の松の板壁を、1mほどの長さの檜の棒2本でリズムを付けて叩きます。本尊が阿弥陀如来であり、鬼走りも奉納のためであるかと言われる。この音は、鬼役やその周辺の役の人だけではなく、見学者の人々も叩いて打ち鳴らすことができます。阿弥陀さんの肩を叩くという感覚がいいなと思っています。(川村優理 登録有形文化財「藤岡家住宅」管理法人NPO法人うらの館館長)

蓮如さまのお通りい〜



毎春、琵琶湖の西岸を南から北へ、轍をたてたりヤカーを曳く数十人の一行が通ります。この先触れの音が聞こえると、湖西地方の人は「ああ、蓮如さまが来られた」と、家の外に出て合掌して一行を迎えます。4月17日に京都の本願寺を出発した蓮如上人の御影(りやカー)に載せてあるが福井吉崎まで行く道中で、江戸時代から続いています。京都でも福井でも行列は同じなのですが、何故か近江が一番合点する…と思う行列であり、先触れの音です。(根本樹枝 文筆業)

神戸・だんじり祭り



神戸はゴールデンウィークに春祭りがあります。どの地区も3月終わり頃からだんじり囃子の練習に入ります。転動などで初めて聴いた人は皆びっくりしますが、我々はだんじりの音に春を感じ、祭り本番に向けて体力づくりを始めます。(露の団六 落語家)

神戸市東灘区や灘区は、5月に地域の神社の例祭でだんじりが巡行をする。豪快なやりまわりなど平坦な岸和田の「ハイスピード仕様」と違い、六甲南麓の斜面位置を行く旧武庫郡のだんじりは「操縦安定性重視」だが、また違った趣がある。そして地区によって異なるだんじり囃子が、氏子でなくとも気分を昂らせてくれる。(中尾嘉孝 全国町並み保存連盟理事)

大坂町中時報鐘「仁政の鐘」



慶長20(1615)年、大坂夏の陣最後の決戦で、豊臣方が敗れて大坂城は落城。豊臣家は滅亡しました。徳川幕府は焦土となった大坂市街の復興を命令。元和5(1619)年に大坂を幕府直轄地とし、寛永6(1629)年に新たな大坂城が完成しました。それから5年後の寛永11(1634)年、3代將軍徳川家光が大坂城を訪れます。事前に、家光が大坂城の乾欄から金の采配を振ると、大坂三郷の地子(土地にかかる税金)が永久に免除されると予告されたため、大坂の町人たちは、本当にそんなことが実現するかどうか、半信半疑で乾欄正面の高麗橋通りに大鼓を叩きました。その大群衆の前には家光が乾欄に登り、金の采配を振った。すると大鼓の音が湧き起り、豊臣家のお膝元であった大坂の町は、一瞬にして徳川幕府からの大恩に深く感謝する町へと変貌を遂げたのです。町人たちは、徳川幕府への感謝の念を忘れぬよう鐘を造り、大坂の町中に時を報せるため、一刻(2時間)毎にその鐘を打たせました。鐘の音を聞いた時に、大坂の人々は徳川幕府への感謝の気持ちを新たにしたりと伝えられます。

「仁政の鐘」とも呼ばれたこの大坂町中時報鐘は、徳川幕府の終焉とともに、その役割を終えます。1870(明治3)年、釣鐘屋敷の鐘楼が撤去され、鐘は近くの長光寺に預けられました。その後、江畔小学校内、府立大阪博物館、大阪府庁舎に移された後、1985(昭和60)年、日没の1日3回、自動的に鳴らされるしくみになっています。地元では、大坂町中時報鐘顕彰保存会を組織して、この鐘の世話を続けてきましたが、土地所有者が変わり、立ち退きを求められていること。何となく問題が解決され、大阪の歴史にとってたいへん重要なこの鐘が現地に残ることを望んでいます。(北川 央 大阪城天守閣館長)

興福寺の鐘



奈良の興福寺五重塔を遠くに見渡せる場所に自宅がある。夕方リビングで用事をこなしているときとゴンという南門鐘の梵鐘が、もう6時だと優待してくれる。ゆたうと時間をおきながら響く鐘の音の余韻は何となく優雅で、不快なことも洗い流してくれるような清々しさがある。興福寺の鐘は朝6時と正午にも鳴らされるが、1日の終わりに向かう刻の鐘の音が一番心にしみてくる。時空を超えた現代で、しばし手を止めて古代に思いを馳せたいときでもある。

日本書紀によれば、飛鳥時代に初めて水時計が設置され人々に時刻を知らせたとあり、明日香村の水落遺跡がその場所であると考えられている。狭い飛鳥盆地に響く鐘の音を古人はどんな思いで聞いたのだろう。(玉城一校 大学非常勤講師)

西陣の機音



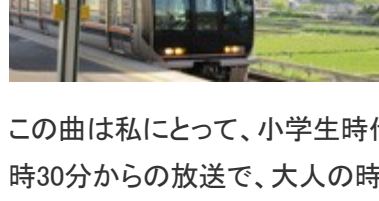
京都は、外部の方が予想される以上に雑然とした町です。さまざまな音があふれていますが、1つだけあげるとすれば機音でしょうか。今や西陣でもほとんど聞かなくなりましたが、私の子供のころはそここから聞こえてきました。西陣織は多くの工程の私的な産業としてよく知られていますが、その工程にかかわるたくさんの人々のたはらきや機音から連想されるのですが、文字におりに暮らした音でして、西陣あたりに行くときにはその辺りをやたらと歩きまわってその音を探しにいきました。音の背後に人の営みが見えるからです。(井上満郎 京都市歴史資料館長・京都産業大学名誉教授)

甲子園球場のジェット風船



甲子園球場での、7回裏阪神タイガースの応援音は、関西が誇れる音といってよいと思います。球場全体に音楽が流れ、全員で掛け声を叫び、ジェット風船を飛ばしたときの音、あの音です。ジェット風船が4万個もあれば、こんな感じになるのか、というのは、甲子園球場でしか味わえません。1人で2個の風船を持つ人も結構いるので、5万個以上が飛び交っていると思われます。まさに、ピー音に包み込まれます。たかが風船なのですが、関西の風物詩といえます。風船メーカーにとっても、笑いが止まらない音なのです。(古山喜章 経営コンサルタント)

JR島本駅の電車接近メロディ『人間みな兄弟〜夜が来る〜』



大阪府の北東部、京都府と隣接する島本町には、毎年1回ずつ講演に伺っている。そのJR島本駅の電車が、2008(平成15)年、2008(平成20)年3月に開業したJR島本駅である。そのJR島本駅の電車接近メロディは、かつてサントリーワールドというイスキーのCM曲として流れていた『人間みな兄弟〜夜が来る〜』である。島本町にサントリーウイスキーの山崎蒸留所があるため、この曲が選ばれたのである。

この曲は私にとって、小学生時代の思い出につながる。その当時「ザ・ガードマン」というテレビドラマがあった。21時30分からの放送で、大人の時間に放送される大人の番組といった趣であったが、小学校高学年にもなると、少しは背伸びして大人の世界に入りたい気持ちも手伝い、この番組を家族揃って見ていたのである。その番組の途中で見られるのがサントリーワールドのCMであった。お酒のしかも洋酒のCMということで、とても面白い。大人の世界がそこにあると感じていたのもだった。当時は曲名を知るよしもなかったが、心に残るハイセンスなメロディとして心に残り、今でも口ずさむことができる。縁あって毎年島本町に伺う機会をいただき、子どもの頃の懐かしい記憶に接することができる喜びは何物にも代えがたいと感じている。(小野恭靖 大阪教育大学教授)

イカ焼き機には生まれたイカが焼かれながら出すキュー〜ンという音

大阪の食べ物、お好み焼きやたこ焼きの店は、東京よりよく見かけるようになった。しかし、イカ焼きのお店はほとんどない。そのイカ焼きを焼く時、イカ焼き機には生まれたイカがキュー〜ンという音を出す。大阪人なら(たぶん)誰もが知っているあの音がいい。焼きやそれは、と思うがどうするか、あるいは、それは間違っている。イカ焼き機を使わずに焼かれたイカ焼きを食べたことがあるだろうか。わたしは、ある。威張ってもしかたないが、そんな、キュー〜ンという音でたてなかつたイカ焼きは美味しくないのがある。なんとも悲しげで、やや哀れな誘う音だが、あれば、もうすぐ美味しいイカ焼きを食べることができると約束する音なのだ。地域性もあるし、あれほど関西にふさわしい音はない。(仲野 徹 大阪大学大学院教授)

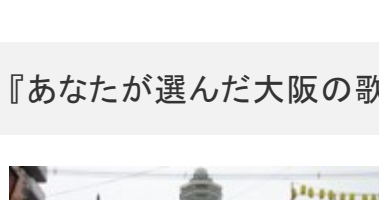
『女ひとり』

デューク・エイセスのこの歌を、高校生の時に校内の合唱コンクールで男性四部合唱しました。それがひょんなことから、同志社女子高校の栄光館という立派なホールで歌わせていただくことになり、男子校の高校生が女子高でコーラスするという、稀有な機会に恵まれました。その後、歌詞にある、大原三千院にも、栞尾高山寺にも、嵐山大覚寺にも行ったのですが、男ひとりだったような気がします。(角野幸博 関西学院大学教授)



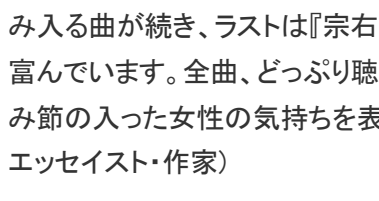
京都の多感な高校生、学問的悩みを抱えた青年のように気づいて、ひとりで三千院、高山寺、大覚寺などを回っていた。(西田正憲 奈良県立大学名誉教授)

『王将』



昭和30年代、40年代の高度成長期、関西経済界は元気があった。「東京に負けまいと、新しい文化や産業を興す経済人は少なくなく、「日本経済の二眼論」が盛んに唱えられた。東京に危急のことあれば、大阪を中心とした関西圏が立ち上がった中核機能を果たす、というもので、国土軸を東京、大阪に置く複眼の考えだった。そのころ、私は大阪の新聞社で働いていたが、社内の空気が東京への対抗意識に燃えていた。東西間の異動も活発で、東京に転動する同僚の送別会でも必ず歌われたのが村田英雄の『王将』だった。「明日は東京に出てゆくからや、何がなんでも勝たねばならぬ…。肩を組んで声を振り絞った。あれから約40年。残念なことに東京の一種集中は進み、二眼論も語れなくなった。でもこの曲がテレビで流れると、私のこぶしに妙に力が入るのだった。(山口安昭 泉大津市文化フォーラムマネージャー)

『あなたが選んだ大阪の歌 〜パンザイ歌謡曲から歌謡曲これイチバン〜』



「大阪の歌」は今や1つのジャンルになっていますね。これまで忘れ難い名曲が数多く生まれました。それらの中からピックアップした32曲を収録したのがこの2枚組アルバムです。2003(平成15)年、ラジオ大阪開局45周年記念にリリースされた記念盤。絶盤になっていたこのアルバムを10年前、大阪駅前ビルの地下街にある中古CDショップで見つけた時、思わず「やったー!」と叫んでしまいました。

『道頓堀人情(天童よしみ)』から始まり、『浪花恋しぐれ(都はるみ、岡千秋)』、『月の法善寺横丁(藤島恒夫)』、『大阪で生まれた女(BORO)』、『大阪ラブソング(海原千里・万里)』、『たそがれの御堂筋(坂本スミ子)』……と心に染み入る曲が続く。ラストは『宗右衛門町ブルース』で締め、コテコテの演歌からノリのいい歌謡曲までバラエティに富んでいる。全曲、どっぷり聴き込むと、誰でも大阪人になります(笑)。それにしても大阪の歌には、ちよびり恨み筋の入った女性の気持ちを表した曲が多いですね。大阪の男が勇気を持って、頼れないからでしょうか。(武部好伸 エッセイスト・作家)